



庭園墓地では、土のなかで分解する専用容器に遺骨を入れて、好きな草木の根元に埋める。墓石は立てない

●庭園墓地(西寿寺)

西寿寺は、京都市右京区の山の腹にある尼寺だ。静かな境内からは、京都の町が一望できる。村井定心住職は女性ならではの感性で、伝統的な枠に縛られない、新しい時代のお寺作りをめざしている。たとえば花が大好きな住職は広い境内にさまざまの木を植え、お寺を訪れる人が四季折々に花を楽しめるよう、工夫している。

「庭園墓地」も、そんな試みのひとつだ。花が咲く時期を計算し、植樹の配置にもこだわった。遺族は好

きな草木を選び、遺骨を根元に埋葬する。人気があるのは枝垂れ梅だが、初秋には、白やピンクのスイフヨウが美しい。

遺骨は、茶葉を原料とした天然素材の専用容器に入れて土に埋める。容器は土のなかで自然分解するので、遺骨は自然に土にもどる仕組みだ。遺族は檀家になる必要はない。納骨費用と専用容器代に一三万五〇〇〇円かかるが、永代供養料は不要だ。

そのほか、桜の下に眠る「桜葬」もあり、二〇種類以上の椿が植えられた「椿の郷」では散骨も可能だ。

永代供養墓を買う前に確かめておくポイントとして、以下の三点が挙げられる。

(1) 「永代供養」が本当に保証されるのか。

経営母体の財政状況はどうか。誰が、どのように供養をおこなうのか。お墓の管理や供養をお寺や業者に託すのだから、信頼できるかどうか、じっくりと確かめた

- (2) 「永代供養」を「永代使用」と誤解しがちだが、お墓が永代に存在するのではない。供養を永代におこなうシステムであって、合葬されるまでの期間もまちまちだ。
- (3) 年間管理料を徴収しないぶん、お墓の維持管理費をどのように捻出しているのか、あるいは捻出するつもりなのか。

期限つきの墓地

お墓を無縁にしないためには、合葬や永代供養など、継承しなくてよい仕組みがあることを挙げた。

二つ目は、墓地を期限つきで使うという発想である。

全国的にはあまり例がないが、千葉県浦安市営霊園では一九九二年から期限つき墓地の募集をおこなっている。使用期間は三〇年で、期限がくれば使用者は墓地を元の状態に戻して市に返還する。更新すれば使用期間を延長することができる。

横浜市や川崎市でも、壁型墓地(板状の墓碑が壁のように並んだ墓地。芝生墓地と同様、使用者が墓石を立てる必要がないので、廉価でお墓を求められる)は使用期間を一

〇年に設定し、一〇年ごとに更新していく方法を採用している。合葬式の墓地では二〇年か三〇年といった期限をもうけている自治体が多い。更新できない場合は別の場所で合葬されるが、更新できる場合でも、更新料は不要で、書類上の手続きをするだけだ。

ヨーロッパでは、こうした期限を設定している墓地が多い。

たとえばフランスのパリ市営墓地は、永代、五〇年、三〇年、一〇年、六年と使用期間がきめ細かく設定されている。土葬が主流なので火葬をする人は少なく、二〇カ所の市営墓地のうち、火葬用は一カ所しかない。それでも火葬用の納骨堂には、五〇年、三〇年、六年と三コースが用意されている。

何年の期限のコースを選んでも、年間管理料はいつさいいらない。期限がくれば更新でき、更新しないのであれば、墓地内の共同墓に改葬される。

一方、多民族国家のシンガポールでは、限られた墓地を有効に利用するという観点から、一九九八年に土葬に関する政策方針を打ち出し、土葬墓地の埋葬期間を最長で一五年と定めた。国土の狭いシンガポールでは火葬を推進しており、火葬率はすでに九割を

超えている。しかし、イスラーム教徒など宗教上の理由で土葬しかできない人もいるため、希望者すべてに墓地を供給できるよう、二〇〇四年以降、埋葬期間が超過すると遺体は掘り返されることになった。

掘り返された遺体は火葬され、公営納骨堂に収められるが、親族がいない場合は三年が経過すると海に散骨される。イスラーム教徒の場合には、遺体のまま別の場所で合葬される。なお、掘り返した区画は三年間放置した後、つぎの人に貸し付けられる。

このように大都市の墓地では、国土の有効利用の観点や景観を守るといった観点から、お墓の使用期限をもうけている国が少なくない。

お墓を無縁にしないためには、「永代使用」という概念を捨て、期限つきで使用し、継承やお墓参りが困難で更新しない場合には、合葬か、お墓の引っ越しを選択するという方法も有効だと考えられる。

最近が高齢で亡くなることが増えたので、亡くなって三〇年も経つと、故人を直接知っている人はほとんどいなくなる。そうなればお参りする人がいなくなるのは当然だろう。

「お墓をどうするか」は自分だけの問題ではない。自分の土地に建てるわけにはいかないのだから、「無縁墓になってもいい」とか、「自分が死んだあとはどうでもいい」という考えでは、残された人たちが困る。墓地が無縁墓だらけになれば、景観が悪くなるし、撤去費用などを考えると、子どもがいない人や単身者などのなかには、お墓を取得できない人も出てくる。

そもそも、家族形態やお墓に対する意識がこれほどまで多様化しているのだから、お墓の選択肢ももっと増えるべきだが、私たち自身も血縁という枠にしばられず、供養やお墓の望ましいあり方について考えていきたい。